DISCUSSION ON RESEARCH ACTIVITY PUBLISHED AS “CONSIDERATION ON THE CHANGE OF THE CULTURAL PROPERTIES PROTECTION AND PRESERVATION, PRACTICAL USE OF CASTLES IN EDO PERIOD”


Hiroshi SHOKEN

In this report I restricted the discussion to the selection of the castles for this consideration and to the basic consideration.

I feel disappointed that any researchers couldn’t fully understand the details of the all castles on the list, generally because in their investigation they only used the reports in the present generations or used the questionnaire to the present person in charge of cultural properties.

I think that the researcher has to investigate historical documents of each castle carefully and directly, even if it is necessary to decrease the number of the castles.

Keywords: Cultural properties, Historic sites, Castle in early modern ages, Maintenance, Abandoned castle

1. はじめに

近世城郭の保存・活用に関する論文の主題は、当方の所属する研究所が課題としてまさに取り組むべき対象であり、大いに興味を持って拝読した。しかし、本研究は、研究に先立って解決すべきいくつかの課題を内にしており、扱い難しい研究課題との認識があった。そこで、この難しい課題を取り組まれた徐氏は、城郭遺跡の研究に非常に価値のある一石を投じられた。

しかしながら、論文の調査対象の抽出、および調査結果の考察について疑義が生じた。今後、本研究を展開されるご予定を念で、研究の端緒となる論文をきちんと理解していただき、いくつかの疑問点について、質問討論させていただきたい。

2. 近世城郭の定義について

調査対象の抽出を討論するために、その前提となる用語の定義についてまず整理しておきたい。

(1) 近世の定義

一般には「近世」は、特に断りが無ければ、安土桃山・江戸時代と限定した場合に、かえって不都合を生じることがある1）。例えば、「近代化遺産」の調査研究においては、年代的には近世に当たる江戸後期に属する構築物であっても、「近代」の対象となる場合があることは周知のことである。

さて、城郭について、近世の期首として考えられる時点は、
①安土桃山城を示す城郭の築城または完成を、近世城郭の幕開けとする場合。これ以降、中世城郭と近世城郭が混在しつつ、近世城郭に移行する。
②徳川家による体制が決定的となった関ヶ原の戦い後とする場合。
③法的・行政的観点から、元和の一国一城令以降とする場合等が挙げられる。

一方、近世の期首についても同様に、
④軍事的に、近代戦を想定して築城された城郭類の建設開始を以て、近代の始まりとする場合。それ以降、江戸時代では近世城郭と近代の城郭が混在する可能性がある。
⑤一般的な年代区分のとおり慶応3年(1867)末までとする場合。
⑥戊辰戦争が完全に終結する明治2年(1869)までとする場合等が挙げられると考える。

主題に従って研究対象の「近世」を決める場合は、始まりを②までに

正 見 泰

Ishikawa Prefectural Research Institute of Kanazawa-Castle, M. Eng.
たる③、終わりを④または⑥とすることも可能であろうが、多く
の城郭研究では①から④または⑥の期間が採用されていると認識して
いる。近年の論考のどのように想定したかは明記されていないので、
一般的な歴史を周期としたと思われるが、英文の表題からは近世=江戸時代のような結果を取り扱う。近年の研究では、対象城郭の抽出に影響するので、貴論文での近世の考え方を確認しておきたい。

(2) 廃城の定義
続いて、廃城となった城郭について、p.2138の左側12行目で「本来の機能を失った近世城郭」と定義されている。また、注3にあるように、廃城の定義を廃城県県により近世城郭の機能を喪失した時点で求めた場合、全ての城郭にこの廃城の定義を一律に適用する
と、ほぼ全ての近世城郭が1871(M4)年まで廃城されたと考えられ
る。ところがこれに対して、表1では廃城県県以降も存続した
と認められた城郭が4割近くも存在している。そうすると、それらの城は、廃城県県以降も前の郷「本来の機能」を維持していた
こととなる。それでは、近世城郭の本来の機能とはどのよう機能
を指しているのか、複数の機能がある場合、どの機能を廃した時
点で廃城となるのかを具体的に明らかにすることをお願いしたい。
一方、「廃城」時期についてであるが、本文中および注3で、
1873(M6)年の「廃城県県」令に言及しているにもかかわらず、報告書の記述を採用している。なおかつ、参考文献には、報告書ら
しのものでは廃城県県の報告書が挙げられておらず、各城郭につい
てどの報告書等を基に判断したかについての情報が不足している。

然るに、その近世城郭の廃城時期についても、表1では1871年、
表3では1870年となっており、異なる2つが挙げられている。
管見にとらえれば、杉山到一氏は、1870年に小田原藩の廃城県令を政
局に提出し許可されたとしている2)。このことから、1870年が相対
のある年と考慮され、報告書等による表1の判断根拠に問題
があるように思われる。定義は全ての対象に対して一律であること
が求められ、単に報告書等に書かれていたとの理由だけでは、妥当
性に欠いていると考える。廃城時期の判断根拠の報告書等を明らか
にするとともに、それらの報告書等に記述される廃城年代を採用す
ることの重要性についてご説明いただきたい。

これからの根拠である市街の定義によって、対象とする城郭が決ま
るのでもあるから、定義を明確にする必要として、本来の対象を行う
こともできないと考えますので、ご回答を是非ともお願いしたい。

3．調査対象と考察について

(1) 調査対象の抽出

貴論文では、調査対象として、p.2133右側本文中の上10行目で　
「近世城郭のうち、廃城県県、p.2133注1で「近世を通じて存在
した城郭で、かつ近世末期に廃城になった」とも説明が異な
っている。注1では、近世を通じて」と特にし、ある城郭が
「廃城」の「廃城県県において（存在した）」との意味に取る。しか
しそうすると、調査対象の近世城郭に限らず江戸時代末に存在
した城郭は、明治維新後現在までに廃城とされたことは疑い
なく、後述の条件を特に付す理由がないと考える。

また、具体的な調査対象とされたNo.7の竜(竜)岡城は、所在地
の記載がないので略述ができないが、史跡指定年から長野県佐久市
のものと推定され、この城郭は幕末に新規に築城された未完成の権
威式城郭であり、所在地は当時の既存城下町とは離れており3)。調
査対象とする理由は見つけられない。

一方、同じ形式でなおかつ国特別史跡である五穂城は、市街化さ
れた地域に立地しているにもかかわらず1)にはなく、貴論文で論
する対象とはなっていない。なお、p.2134右側本文中の下1頁
には、「一方、史跡としての近世城郭の指定は、・・・1921(T11)
年に指定された日本初の西村式城郭である五穂城(佐賀市)が最初
である」とし、五穂城が調査対象の近世城郭であることに記述さ
れており、近世あるいは近世城郭の定義論文で混在しているよ
うに見える。この場合、純粋なる山城の産本城(上の城)は対象とし
ているのに、市街地の三原城(下の城)は対象としていないなど、貴論文の
調査対象の抽出方法や近世城郭の扱いについて戸惑いを覚えた。

そこで、都市部の考え方(人口密度、面積、対象城郭との距離等)
なども判断基準に設けていると思われるので、調査対象を抽出し
た判断基準や、城郭等22件あるとしている対象外の城郭を具体的
にお示し願いたい。

また、調査対象から、2008年6月に国史跡指定された金沢城(石
川県)は外れている。貴論文の受理日は2009年付、本研究の助成を
受けたものの2008年度であるが、金沢県も研究着手時点では対象
となっていくと思われる。これから推察するに、調査対象の規定は、
「2006年以前に(国史跡に指定された城郭)」等のように思われるが、
見解をお聞かせ願いたい。

(2) 戦後の石垣修理等の考察
続いて、p.2137の左側本文末行より次に、「戦後の城郭
遺構の修理や復旧の記録は、1965年の「国指定史跡整備事業」
が始まるまでの見当たらない」。「石垣の修理・復旧事業は1965年か
らようやく行われるようになった。」として、表3では、1950年
代に小田原城の天守台石垣が修理または復元されていることを示し
ている。前述の杉山氏も、天守台の復旧工事が行われ1953年に完
成したと、としているので、当該考察には過誤または説明不足があ
り、結論に影響を及ぼすように考えることが、見解をお聞かせ願いたい。

４．おわりに

以上、本文では、言葉の定義を含む調査対象の抽出、および調査
結果の考察に関する基本的な部分だけでの考察を終えた。後世の報告
書等の記述やアンケートによる調査だけでは、表中の各城郭すべての
細かな歴史まで把握できなかったのでの危険がある。たとえ
調査対象の城郭数を絞ったとしても、研究者自身が直接各城郭の当
時の史料を丹念に調査する必要があったわけではないと考える。

研究課題として興味があり、非常に重要な課題であるだけに、今
後の徐氏の成果が期待されるので、ご回答を賜りたいと考える。

参考文献
1) 井上宗和：『ものと人間の文化史』、法政大学出版局、1973
(特にpp.58-70,73-74,85-90)
2) 杉山到一：『小田原城調査の歩み、小田原城とその城下』、pp.206-210、
小田原市教育委員会、1990
3) 三浦正幸監修：『嵐山江ノ三藩「城と陣屋」総覧』、東日本編/西日本編、
習志野研究社、2006
4) 三浦正幸：城の鑑賞基礎知識、文史堂、1999

(2008年10月30日原稿受理、2010年1月12日採用決定)